

ひろめて代ををさめしかばすこし代をさまりぬ。其後大乘經の智慧及ざりしかば、一乘經の智慧をとり
 いだして代ををさめしかばすこししばらく代をさまりぬ。今の代は外經も小乘經も大乘經も一乘法花經
 等もかなわぬよとなれり。ゆへいかなとなれば、衆生の貪・瞋・痴の心のかしこきこと、大覺世尊の大
 善にかしこきがごとし。譬へば犬は鼻のかしこき事人にすぎたり。又、鼻の禽獸をかくことは大聖の鼻
 通にもをとらず。ふくろうがみゝのかしこき、とびの眼のかしこき、すゞめの舌のかるき、りうの身の
 かしこき、皆かしこき人にもすぐれて候。そのやうに末代濁世の心の貪欲・瞋恚・愚痴のかしこきは、
 いかなる賢人・聖人も治がたき事なり。其故は貪欲をば仏不淨觀の薬をもて治し、瞋恚をば慈悲觀をも
 て治、愚痴をば十二因縁觀をもてこそ治給に、いまは此の法門をとひて、人ををとして貪欲・瞋恚・愚
 痴をますなり。譬へば火をば水をもつてけす、悪をば善をもつて打。しかるにかへりて水より出ぬる火
 をば、水をかくればあぶらになりていよく大火となるなり。今末代惡世に世間の惡より出世の法門に
 つきて大惡出生せり。これをばしらずして、今の人々善根をすゝれば、いよく代のほろぶる事出来
 せり。今の代の天台・真言等の諸宗の僧等をやしなうは、外は善根とこそ見ゆれども内は十惡五逆にも
 すぎたる大惡なり。しかれば代のをさまらん事は、大覺世尊の智慧ごとくなる智人世に有て、仙予國王
 のごとくなる賢王とよりあひて、一向に善根をとゞめ、大惡をもて八宗の智人とをもうものを、或はせ
 め、或はながし、或はせをとゞめ、或は頭をはねてこそ代はすこしをさまるべきにて候へ。法花經の第
 一の卷の「諸法実相、乃至、唯仏与仏乃能究竟」ととかれて候はこれなり。「本末究竟」と申は、本者

悪のね善の根、末と申は悪のをわり善の終ぞかし。善悪の根本枝葉をさとり極めたるを仏とは申なり。(天台云く、「夫れ一心に十法界を具す」等云云。章安云く、「仏尚此を大事と為す。何ぞ解し易きことを得べけんや」と。妙樂云、「乃此是れ終窮究の極説なり」等云云。法花經云く、「皆実相と相違背せず」等云云。天台之を承けて云く、「一切世間の治生産業は皆実相と相違背せず」等云云。智者とは世間の法より外に仏法を行す。世間の治世の法を能々心へて候を智者とは申なり。殷の代の濁て民のわづらいしを、大公望出世して殷の紂が頸を切て民のなげきをやめ、二世王が民の口にながし、張良出て代ををさめ民の口をあまくせし。此等は仏法已前なれども教主釈尊の御使として民をたすけしなり。外經の人々はしらざりしかども、彼等の人々の智慧は内心には仏法の智慧をさしはさみたりしなり。今の代には正嘉の大地震、文永大せひくの時、智慧かしこき国主あらましかば、日蓮をば用つべかりしなり。それこそなからめ、文永九年のどしうち、十一年の蒙古のせめの時は、周の文王の大公望をむかへしがごとく、殷の高丁王の傅悦を七里より請せしがごとくすべかりしぞかし。日月は生盲の者財にあわず、賢人は愚王のにくむとはこれなり。しげきゆへにしろさず。法花經の御心と申はこれひの事にて候。外のことゝをぼすべからず。大悪は大善の来るべき瑞相なり。一閻浮提うちみだすならば、「閻浮提内広令流布」はよも疑候はじ。此大進阿闍梨を故六郎入道殿の御はかへつかわし候。むかしこの法門を聞て候人々には、関東の内ならば我とゆきて其はかに自我偈よみ候はんと存て候。しかれども、当時のありさまは日蓮かしこへゆくならば、其日に一国にきこへ、又かまくらまでもさわぎ候はん